



飯田市歴研ニュース

News Letter

No. 86

The Iida City Institute of Historical Research

2017年2月1日 発行

飯田市歴史研究所

〒395-0002

長野県飯田市上郷飯沼3145

TEL 0265-53-4670

FAX 0265-21-1173

E-mail iehr@city.iida.nagano.jp平成28年度文化庁文化芸術振興費補助金
(文化遺産を活かした地域活性化事業)

ワークショップ

芝居興行と地域社会 —近世の荘内藩の事例より—

2017年2月26日(日) 10:00~15:00

講演：佐治 ゆかり（郡山市立美術館長）

コメント：吉田 伸之（歴史研究所所長・東京大学名誉教授）

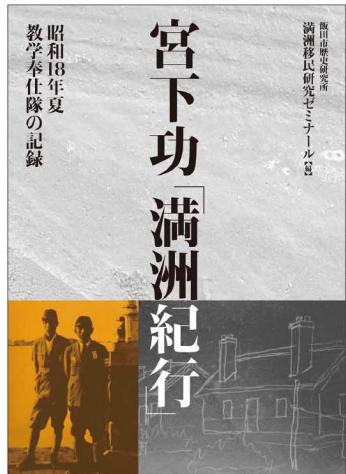
高田 正男（黒田人形保存会）

澤柳 太門（今田人形座）

会場：飯田市役所 C棟3階会議室（飯田市大久保町2534）

山形県酒田市黒森で毎年2月15日と17日に行われている黒森歌舞伎は、享保以来の歴史を持ち、地芝居の中でも古格の存在として知られています。妻堂（サイノカミ）の余興として奉納される芝居が、社会や時代の変転の中で、今日までどのように存在し続けてきたのかを紹介し、芝居興行と地域社会の関係について考えます。

※参加費や事前のお申し込みは必要ありません。
お気軽にお越しください。

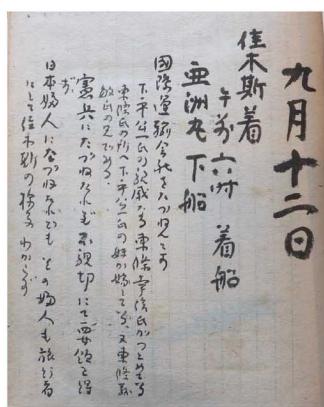
2017年春
刊行予定

宮下功「満洲紀行」

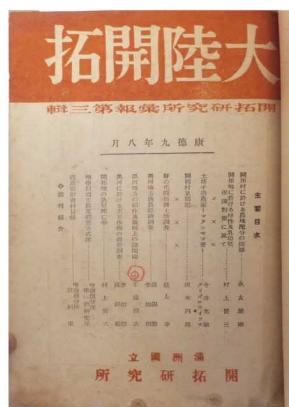
—昭和18年夏 教学奉仕隊の記録—

昭和18年夏、全国325名の一員として下久堅国民学校の宮下功校長は、教学奉仕隊に参加し、満洲国（現中国東北部）へ行きました。青少年義勇隊訓練所と下伊那が送出した開拓団を訪れ、41日間の記録を残しました。現地の学校・子どもたち・社会の様子を克明にメモし、資料を持ち帰り、帰国後膨大な手書き記録を「満洲紀行」として13冊にまとめました。満洲移民研究ゼミではこの記録の翻刻に取り組んできました。敗戦間際の青少年義勇軍、開拓団、満洲を知ることができる貴重な史料です。

満洲移民研究ゼミナル 編集／飯田市歴史研究所 発行 A5判 510頁 並製 予価 2,000円



宮下功氏 佳木斯（ジャムス）到着の記述

黒河街恵永国民学校3年児童のクレヨン画
(日独伊三国が英國を攻撃している)綴じこみ冊子
(開拓研究所「大陸開拓」)

教学奉仕隊一行は金山から、奉天—新京—ハルビン—イラハ—黒河—佳木斯—牡丹江を訪れました。宮下氏は下伊那から渡満した義勇隊の多いイラハへ13日間滞在しました。毎日の行動・気温（室内と室外）・食事を記録し、使用したお金・訪れた学校の児童作品・開拓団の資料を収集しています。「学校経営」などの資料から日本の教育方針へ移行している様子がわかります。下久堅国民学校職員宛77通・家族宛18通の葉書も残されています。

飯田・下伊那の歴史と景観 その4

飯田市街の景観



通り町周辺から風越山方面を望む



大火前の飯田『下伊那写真帖』より



昭和22年の大火直後の飯田

飯田市街には、平瓦を並べて壁面にはり、その継ぎ目にかまぼこ型に漆喰を盛り上げたなまこ壁の土蔵がところどころに目につく。先日飯田を訪ねた建築家が飯田市街の土蔵の壁が褐色のまだら模様になっていることを不思議がった。なまこ壁といえば通常、平瓦の黒と漆喰の白によるモノトーンの色彩となるからだ。なるほど褐色の土蔵の多くは、防火帯として昭和22年の大火後に設けられた裏界線に添ってよくみられ、飯田市街の景観を特徴づけている。実は、近世の城下町を描いた絵図を見ると、裏界線の多くは城下に整備された井水（上水道）の上に設けられていることがわかる。土蔵は防火に配慮し、その井水に添って建てられたのだろう。そして昭和22年の大火の際、焼かれた街で燃え残ったのは、コンクリートの建物とそれらの土蔵くらいだった。街の8割、約4000戸を焼失させた火災の炎に焼かれた土蔵のなまこ壁が、高温により変色したとしてもおかしくない。そう考えれば、飯田市街の褐色の土蔵は、近世、近代のこの街の記憶を景観として現代に伝える生き証人のような存在だと言えないだろうか。

(研究員 樋口 貴彦)



飯田市歴史研究所 年報14

【特集】飯田・下伊那の歴史的景観

2015年9月に開催された飯田市地域史研究集会の特集「飯田・下伊那の歴史的景観」を中心に、地域史研究事業の成果や飯田・下伊那をフィールドとした研究論文などを収録しています。

飯田市歴史研究所 編 B5判 290頁 定価1,800円

◆◆◆◆ 研究活動助成報告会を開催します ◆◆◆◆

歴史研究所では、個人や団体の歴史研究活動に対して助成を行っています。今年度、助成を申請されたみなさんが研究報告を行います。

開催日：2月25日 土

時 間：9：30～11：30

会 場：飯田市役所 C棟3階会議室
(飯田市大久保町2534)

報 告

●「古代伊那郡の具体的な姿・風景」

長野県考古学会 上・下伊那学会員有志

●「初等教育修了後の進路をめぐる学校と地域社会の関係史 —戦時期長野県下伊那地方を事例とした職業指導の実態—」

鈴木 智子

●「近世中後期の労働力展開と地域変容」速渡 賀大

ブラジルのなかの下伊那

安岡 健一 (歴史研究所調査研究員・大阪大学大学院特任講師)

三穂、千代、陽臘…懐かしい地名が次々にあらわれて、大いに驚いた。ブラジルのサンパウロ市内から長距離バスで4時間ほどのところにある、レジストロ地区のことだ。飯田下伊那の地名が記載されていたのは、レジストロに残される「戸籍簿」という移民の出身地等を記した資料だ。私はこの資料をレジストロ日伯文化協会でお借りして、泊まっていたホテルで閲覧させていただいていた。戸籍簿を通覧すると、北海道や八丈島からの移住者が多数であることがわかるが、長野県民も相当おり、下伊那の関係者も20戸程含まれている。

文協の会長である福澤さんにお願いし、さっそくゆかりのある人がいるかを確認していただいた。そこで出会えたのが写真の牧内さんだ。義父にあたる牧内忠さんは幼いころに家族に連れられて川路地区からブラジルに渡り、戦後に故郷を訪れたこともある。川路小学校の資料室をたずねた際、故郷訪問時の写真を見たことがある。川路にもブラジルへ移民した人がいたのだな、とだけ思っていたが、まさかご子孫にお会いできるとは思っていなかった。現在は農業にはたずさわっておられないが、1960年代には紅茶を100ヘクタール以上経営していたという(レジストロは茶とバナナが名産だった。『南信州』1962年11月9日号による。)

ご存知の通り、川路は日中戦争全面化後に「分村移民」形式で移民を送出した村だ。ブラジルから帰国した翌月に中国を訪問した際には、集団自決跡と思われる付近を少しだけ歩いたが、雪と氷に覆われた様子にその跡を見出すことはできず、ただ偲ぶだけであった。レジストロの方々を思い出し、歴史における「if」について考えた。

長野にゆかりのある日系ブラジル移民の団体「信友会」から、三六災後、上下伊那の災害孤児に対して約12万円の寄付があった歴史もある(『南信州』1962年10月6日)。ブラジルと下伊那とのつながりも、いろいろと学ぶべきことがありそうだ。

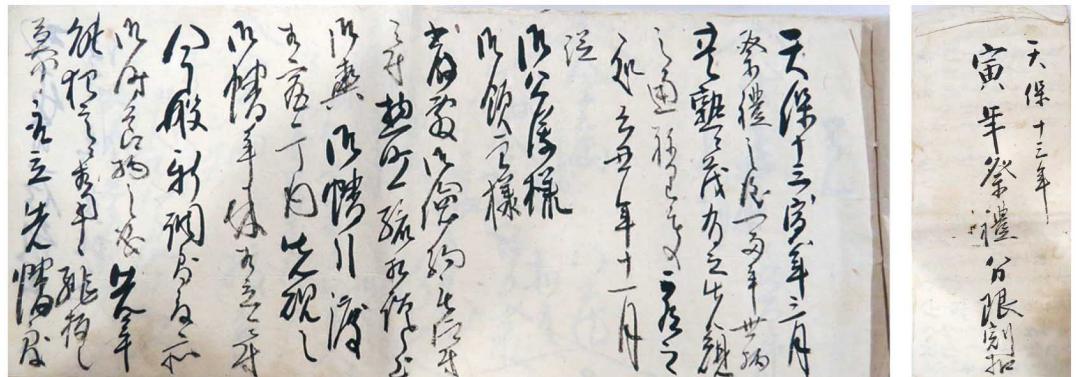


2015年10月 レジストロにて

お練り祭りと天保の改革－澤村屋呉服店の史料から－

お練り祭りは、飯田町を守護する神社(鎮守)とされた大宮諏訪神社の式年大祭で、7年ごとに行われます。お練り祭りは1652(慶安5)年に始まり、その後一時中断したものの、1719(享保4)年に再興されたといわれています。昨年の3月にもお練り祭りが行われ、多いに賑わいました。今回、飯田市歴史研究所では、飯田市知久町の澤村屋呉服店に伝わった史料を調査する機会に恵まれ、その中に江戸時代後期から幕末にかけてのお練り祭りに関する史料が含まれていることがわかりました。今回取り上げる「天保十三年 寅年祭礼分限割扣」もその1つです。この史料には、祭礼に必要な費用の分担と思われる記載がなされていますが、その冒頭にお練り祭りでの練り物について、これまでの通りに行うべきことしながらも、「従 御公儀様 御領主 厳敷御儉約被仰付ニ付」、つまり幕府および藩主から厳しい儉約を命じられているため、惣町一同で相談の上、「御輿」や「御幡」の取り扱いについて取り決めています。この前年、幕府は老中水野忠邦を中心に改革の断行を宣言、厳しい儉約令を出しており、飯田藩からも儉約令が出されていました。ちなみにこの時、飯田藩主の堀親喜も側用人として幕府の中枢にいました。お練り祭りもこうした政治的な動向の影響を受けながら行われていたことがこの史料からわかります。この史料を含め、澤村屋呉服店に伝わった史料群には、江戸後期の町政運営に関わると思われるものが含まれており、今後、鋭意調査を進めていきたいと考えています。

(研究員 千葉 拓真)



飯田市知久町の澤村屋呉服店に伝わった史料「天保十三年 寅年祭礼分限割扣」

歴研書評会のお知らせ

田嶋 一著

『〈少年〉と〈青年〉の近代日本』を読む

2月25日土 13:30~16:00

報告者：多和田 真理子（歴史研究所調査研究員・相模女子大学講師）
安岡 健一（歴史研究所調査研究員・大阪大学大学院特任講師）

リプライ：田嶋 一（歴史研究所顧問研究員・國學院大學教授）

場 所：飯田市役所 C棟3階会議室（飯田市大久保町2534）

※参加費や事前のお申し込みは必要ありません。



歴史研究所顧問研究員の田嶋一氏が昨年春に上梓した大著を学びます。本書は、次世代を育てる仕組みが、近世から近代へどのように移行したのか、青年期の問題に焦点を当てながら描くものです。氏は最近、伊那自由大学についても精力的な研究をされており、氏の研究のエッセンスを学ぶまたとない機会となります。ぜひご参加下さい。

※田嶋一著『〈少年〉と〈青年〉の近代日本一人間形成と教育の社会史』は、2016年に東京大学出版会から定価8,800円（税込9,504円）で刊行されています。

ワークショップ

飯田・下伊那の領主たちと地域社会Ⅱ

3月11日土 13:30~16:30

報告者：千葉 拓真（歴史研究所研究員）

「生類憐みの令をめぐる飯田藩と村々
—元禄2年令を事例に—」（仮）

羽田 真也（歴史研究所研究員）

「17世紀の山の用益と飯田藩
—座光寺村を事例として—」（仮）

コメント：齊藤 紘子（京都清華大学人文学部）

場 所：上郷公民館103会議室（飯田市上郷飯沼3092-9）

※参加をご希望の方は、事前に歴史研究所までお申込みください。

江戸時代、飯田・下伊那は、飯田藩や高須藩、交代寄合信濃衆などの藩や旗本知行所、そして幕領などに分かれており、そこには約150もの村がありました。例えば飯田藩はそのうち約30ヶ村の村々を支配していました。こうした領主たちと村々との関係はどのようなものだったのでしょうか。今回のワークショップでは、飯田藩を取り上げ、飯田藩による支配の在り方と、その支配の下に置かれた村々の実態について、それぞれ飯田藩側の視点、村側の視点から報告を行い、それらをもとに藩による支配と村々との関係性、そして飯田・下伊那の地域的特性について論じることを目指します。

歴研ゼミ＆ワークショップ 2月・3月の予定

受講生募集中

スタッフとともに歴史を学んでみませんか。

場所：歴史研究所 研修室

近世史ゼミ 担当：千葉拓真（研究員）

2月7日・21日／3月7日・21日（第1・第3火曜日）19:00～20:40

近現代史ゼミ 担当：田中雅孝（調査研究員）

2月25日／3月11日・25日（第2・第4土曜日）10:00～11:40

わが町の建築史ゼミ 担当：樋口貴彦（研究員）

2月16日／3月16日（第3木曜日）18:30～20:00

満洲移民研究ゼミ 担当：本島和人（調査研究員）

第67回 2月4日／第68回 3月4日（第1土曜日）10:00～11:40

思想史ワークショップ 市民の皆さんのが自主的に学び合う場

2月1日・15日／3月1日・15日（第1・第3水曜日）19:00～20:40

ゼミ・ワークショップの詳細・お申込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL: 0265-53-4670

飯田・上飯田の歴史シリーズ第4回

地域史講座

『飯田御用覚書』の世界

延宝2年(1674)、元禄2年(1689)の飯田

17世紀後半に、堀氏飯田藩の重臣たちが記した2冊の記録を繙きながら、当時の飯田藩と山々に抱かれた「山都」である城下町飯田の特徴を見て行きたいと思います。

開催日：3月18日土

時 間：14:00～15:30

講 師：吉田 伸之
(歴史研究所所長・東京大学名誉教授)

会 場：飯田市役所 C棟3階会議室

(飯田市大久保町2534)

※参加費や事前のお申し込みは必要ありません。
お気軽にお越しください。

開所時間：午前9時～午後5時

休所日：日曜日・月曜日・祝日・12月29日～1月3日